



Title	メタフュシカ 第52号 総報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2021, 52, p. 123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85569
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【彙報】

○ 哲学哲学史・現代思想文化学

〔研究室について〕

現在（2021年11月15日）、学部の哲学・思想文化学専修には26名が在籍している。大学院の哲学哲学史専門分野には博士前期課程・同後期課程に15名が在籍しており、現代思想文化学専門分野には博士前期課程・同後期課程に4名が在籍している。また、哲学哲学史専門分野には舟場保之教授、嘉目准教授、三木那由他講師、西條玲奈助教が所属しており、現代思想文化学専門分野には望月太郎教授、中村征樹教授（兼任）が所属している。

本年度の講義・演習は以下の通りである。舟場教授「カントと人権」、「Hannah Arendt, Elemente und Ursprunge totaler Herrschaft を読む I・II」、「ドイツ哲学基本文献講読 I・II」、「J. ハーバーマスの思想 XIV」。嘉目准教授「討議をめぐる諸問題（4）：討議におけるアノマリーの言説」、「フィヒテ哲学の研究（2）：フィヒテの觀念論」、「フィヒテ『全知識学の基礎』を読む（3）」、「バース著作集を読む（3）・（4）：記号学」。三木講師「マーガレット・ギルバート『社会的事実について』を読む」「ポール・グライスの哲学体系（2）」「会話の哲学」「論理学初級（1）・（2）」。西條助教「分析形而上学における現代普遍論争とその射程（1）・（2）」。望月教授「SDGs を途上国に現地化する：哲学プラクティスを通した国際協力」、「アフリカ哲学とは何か」、「モース『贈与論』を読む」。中村教授「生命科学の病理学」（江口太郎氏と共同）、「レジリエンスを考える」、「文理の溝を超えて：『高等教育における人文・アートと科学・工学・医学の融合』を読む」。そのほか、本研究室のリレー講義「西洋哲学通史（デカルトから現代まで）」（仏文研究室山上浩嗣教授協力）が開講されており、また、例年通り、各教授ないし准教授ごとに、学位論文執筆のための演習が実施されている。

なお、他部局の教員による講義として、言語文化研究科の Malik Luke 特任准教授が「文字通りの意味についての現代の討論」を開講している。

研究室の成果発信として、本機関誌『メタフェシカ』と欧文機関誌 *Philosophia OSAKA* を毎年刊行している。同欧文機関誌の前年度号には、チュラーロンコーン大学の Chutima PRAGATWUTISARN 氏より “The Promise of Happiness: Political Imagination in Contemporary Thai Society” を寄稿いただきましたとともに、当研究室から以下の論文が掲載された。舟場教授 „Wie sollen Einwände erhoben werden? Vorbemerkungen zur Theorie der Verantwortung“、嘉目准教授 „A Preliminary Study to Explore the Connection with his Doctrine of the Bild“。また、大阪大学文学会編『待兼山論叢』哲学篇を通じても、毎年、研究成果を発信している。同誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。嘉目准教授「発語媒介効果の不可逆性とフィクションの倫理的責任」、入江祐加「心理学から歴史学、さらには哲学へ—ディルタイ中期における「心理学」の哲学的可能性—」、三輪泰之（哲学哲学史博士後期課程）「「仮象の論理」から普遍性に関する論理へ—『純粹理性批判』を「推論する能力」としての理性から再考する—」。なお、研究室公式ホームページ (<http://>)

www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy）および YouTube 公式チャンネル [videometaphysical](#) を通じても、研究教育活動の関連情報を隨時発信している。また研究室の活動基盤として、研究会 [handai metaphysica](#) を主催している。

研究室の関連催事として、2020 年 11 月に UNESCO 「世界哲学の日」記念イベントとして、入江幸男名誉教授、須藤訓任現代思想文化学教授、舟場保之哲学哲学史教授による討論会「現代哲学における脱超越論化の行方」を開催した。(2020 年 11 月～ 2021 年 10 月の 1 年間に実施されたものを記載。以下も同様)

そのほか、院生主催の研究会が定期的に開催されている。2021 年 3 月に第 19 回哲学ワークショップが開催された。そこでは、以下の発表がおこなわれた。三角成彦（文学研究科博士前期課程修了生）「近代批判の後と先：今村仁司、栗本慎一郎再読」、志水凜（哲学哲学史博士前期課程）「行為（action）の場としての公的領域の拡張可能性」、三富雄介（哲学哲学史博士前期課程）「現代認識論とヴィトゲンシュタインにおける確実性概念の相違——「理性」に注目して——」。

〔教員について〕

須藤教授が、2021 年 3 月末にて定年を迎えた。

舟場教授が、2020 年 9 月 10 日、Zoom を用いて行われた Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquiumにおいて *Wie sollen Einwände erhoben werden? Vorbemerkungen zur Theorie der Verantwortung* というタイトルで発表した。また、2021 年 3 月に、論文 „*Wie sollen Einwände erhoben werden? Vorbemerkungen zur Theorie der Verantwortung*“ (*Philosophia OSAKA*, No. 16 (pp. 39-46)) を刊行した。

嘉目准教授が 2020 年 12 月に論文「発語媒介効果の不可逆性とフィクションの倫理的責任」(『待兼山論叢』54 号哲学篇、2020 年 12 月、所収、pp. 1-18)、2021 年 3 月に “Fichte's Empirical Realism: A Preliminary Study to Explore the Connection with his Doctrine of the Bild”, (*Philosophia Osaka* (16), March 2021, pp. 47-56.)、同年同月 “Racist Utterances as Quasi-fictional: Rethinking Habermas's Theory of Strategic and Dramaturgical Actions” (『大阪大学大学院文学研究科紀要』第 61 号、2021 年 3 月、所収、pp. 1-21.) が掲載された。

三木講師が 2020 年 10 月に共訳書ロバート・ブランダム著『プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか』(上下) (加藤隆文・朱喜哲・田中凌・三木那由他訳、勁草書房) を刊行した。また、同年 11 月に論文 “On the Infinite Regress of a Speaker's Intentions,” (Annals of the Japan 1 Y5-研究室 _machikaneT_ONO_03.indd 1 2021/11/05 18:21 Association for Philosophy of Science, 29, pp. 41-56) が掲載された。また 2019 年に刊行した単著『話し手の意味の心理性と公共性』(勁草書房) の合評会として、2020 年 9 月 21 日に推論主義研究会において辻大介・山口尚と「『話し手の意味の心理性と公共性』合評会」、同年 10 月 24 日に哲学オンラインセミナーにて横野沙央理・松井隆明と「トークイベント三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』」、2021 年 3 月 12 日に松阪陽一・藤川直也・浅利みなとと「三木那由他『話し手の意味の心理性と公共性』書評会」を開催した。2021 年 3 月 12 日に日本大学文理学部人文科学研究所第 16 回哲学ワークショップにおいて招待講演「地上のロゴス：概念分析と偏見」をおこなった。および、2020 年 9 月に「異

質な共同体が現れるとき一解釈不能な有意味性」(『ユリイカ 10月臨時増刊号 総特集＊別役実の世界』, pp. 70-78)、同年10月に「「フラットな対話」と称するコミュニケーションに隠された「暴力」を考える」(『現代ビジネス』, 2020年10月, <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/76070>)、同年12月に「コミュニケーション的暴力としての、意味の占有」(『群像 2021年1月号』, pp. 296-303)、2021年4月に「陰謀論はコミュニケーションに何をもたらすのか」(『現代思想 2021年5月号 (特集:「陰謀論」の時代)』, pp. 192-201)を寄稿。2021年4月『群像 2021年5月号』より『言葉の展望台』連載を開始した。

西條助教が、2020年12月に論文「シス特権とトランス嫌悪言説の分析—ジェンダー帰属の通時的固定性とジェンダー規範批判」(『メタフュシカ』, 大阪大学文学研究科紀要, 第51号, pp. 1-12.)を刊行。また同年10月に大阪大学COデザインセンターダイバーシティ・カフェ19にて口頭発表「多数派が得をしていることはなんだろうか?:シスジェンダーの特権にきづくために」、2021年3月にWOMEN: WOVEN No. 1において口頭発表「わたしたちはなぜ自分を女性とみなすのか:分析フェミニズムが論じるジェンダー化の概念」、同年5月に応用哲学会13回年次研究大会において口頭発表「ファンダム作品研究の倫理」をおこなった。2020年12月に「ロボットとぬいぐるみの距離感から考える人と物の関係性」(『ユリイカ』, 青土社, 769 (53-1), pp. 247-251.)、2021年2月に「N. グッドマンの贊成論と芸術家のスタイル」(Art Research Online, <https://www.Artresearchonline.com/issue - 5a.>)を寄稿した。2020年10月に『日刊工業新聞ニュースイッチ』にインタビュー記事「いつまで炎上する? A.I.にジェンダーは必要か。背景に「ステレオタイプの黙認」」(昆梓紗執筆、<https://newswitch.jp/p/24011>)が掲載された。

望月教授が、2021年1月に論文「哲学プラクティスを通した開発途上国との国際協力」(『現代思想』49(1) 185-196頁. 青土社)、2020年12月に論文'Quality Indicators for Philosophical Practice: Self-reflection as Sign for the Depth of a Dialogue.' (Peter Harteloh,との共著 Philosophical Practice and Counselling, No.10, pp. 141-159. The Korean Society of Philosophical Practice, South Korea)、2020年10月に論文'Philosophical Perspectives of Hate Speech in/for Asia.' (Yu Izumi, Kanit Sirichan, San Tun, Toru Oga との共著, Conference Proceedings of 5th INTERNATIONAL CONFERENCE on Hate Speech in Asia: Challenges and Solutions, pp. 32-49, Asia Centre, Bangkok, Thailand)を刊行した。また2021年4月17日に口頭発表'Southeast Asian Philosophy as Arena of World Philosophy.' (Philosophy of Religion in Southeast Asia Webinar, Malaysian Society of Philosophy and Religion)、2021年3月15日に'Virtual Learning and Cross-cultural Experience' (The Opportunities and The Challenges for Virtual Learning and International Exchange, Graduate School of Letters, Osaka University)、2020年11月18日に'War' Against COVID-19, Is it a Metaphor or Reality?' (ASEAN-Japan Relations: The Impact of The COVID-19 Pandemic, Asia Centre, Bangkok, Thailand,)、2020年10月7日に'Philosophical Perspectives of Hate Speech in/for Asia.' (Yu Izumi, Kanit Sirichan, San Tun, Toru Oga との共著、5th INTERNATIONAL CONFERENCE on Hate Speech in Asia: Challenges and Solutions, Asia Centre, Bangkok, Thailand)をおこなった。

中村教授が、2021年2月に共著『未来へひろがるサイエンス』(文部科学省検定済教科書中学

校理科用、啓林館）を刊行した。同年4月、5月にNHK 土曜ドラマ「今ここにある危機とぼくの好感度について」の研究不正調査考証を担当した。同年5月に論文「科学技術基本法改正と人文・社会科学」（『学術の動向』、26巻5号、pp. 36-41）を刊行した。同月に事典項目「研究公正」（日本科学史学会編『科学史事典』丸善出版、pp. 364-365）を刊行した。同月21日に論考「NHK 土曜ドラマと今ここにある大学の危機について」（朝日新聞社言論サイト『論座』）を発表した。同年7月には共著論文「単純化しすぎた世界：科学のプロフェッショナリズムがもたらす期待と驚異」（『対話型学術誌といとうとい』、0号、pp. 33-41）を刊行した。

[学生について]

哲学哲学史専門分野は以下の通りである。溝越大秦（博士前期課程（現博士後期課程））が2020年8月29日に日本体育・スポーツ哲学会第43回大会にて口頭発表「ウイットゲンシュタイン哲学を用いた武道思想の再構築検討」を、同年11月に関西倫理学会2020年度大会にて口頭発表「空手道稽古をウイットゲンシュタイン哲学から説明する試み」をおこなった。また、論文「哲学的治療において必要なもの」（『新進研究者 Research Notes 第3号、pp. 55-62』）を刊行した。

岩本智孝（博士前期課程（現博士後期課程））が2020年11月14日に日本カント協会第45回学会にて口頭発表「カッシーラーはどのような観念論者か——『シンボル形式の哲学』を中心に——」をおこなった。また、論文「カッシーラーとフォスラー——その哲学的立場の相違について——」（『メタフュシカ』第51号、pp. 55-65.）を刊行した。

三富雄介（博士前期課程）が、2020年12月に解説「ネットワーク・セルフ 関係、プロセス、人の同一性（キャサリン・ウォレス著）」（『メタフュシカ』、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、51号、pp. 73-79）、2021年に論文「『他人の歯に痛みを感じる』ことは可能なのか」（『哲学の探究』、哲学若手研究者フォーラム、48号、pp. 157-177）、同年「私についての言明における自己意識と指示—アンスコムの洞察と誤り—」（『第3回若手研究者フォーラム要旨集』、大阪大学大学院文学研究科、pp. 6-9、査読あり）を刊行した。また研究発表として、2020年9月19日にポスター発表「『他人の歯に痛みを持つ』とはいかなる経験なのか」（哲学若手研究者フォーラム、オンライン）、同年12月12日哲学オンラインセミナーにおいて口頭発表「チザム的な自己認識の可能性について」、2021年2月20日第19回哲学ワークショップにおいて口頭発表「現代認識論とウイットゲンシュタインにおける確実性概念の相違—『理性』に注目して—」、同年3月13日第3回大阪大学大学院文学研究科若手研究者フォーラムにおいて口頭発表「私についての言明における自己意識と指示—アンスコムの洞察と誤り—」、同年5月22日応用哲学会第13回年次研究大会において口頭発表「一人称の信念は認識的に確実な信念でありうるか？」を行なった。

現代思想文化学専門分野では、博士後期課程の西村知紘が2018年11月に論文「ハイデガーにおける語りと言明」（『現象学年報』第34号：153-160）を刊行した。

哲学・思想文化学専修では、澤井優花が2021年2月19日に大阪大学学部学生による自主研究奨励事業研究発表会において口頭発表「19世紀イギリスの学者ウェルビーによるSignificsの概念について」をおこなった。

現代思想文化学専門分野は以下の通りである。大久保歩が、2021年3月に翻訳書『地理哲学ードゥルーズ & ガタリ『哲学とは何か』について』（ロドルフ・ガシェ著、月曜社）、2020年12月に『暴力一手すりなき思考』（リチャード・J・バーンスタイン著、斎藤元紀監訳、梅田孝太／大久保歩／大森一三／川口茂雄／渡邊和典訳、法政大学出版局）を刊行した。2021年2月12日に口頭発表「R・J・バーンスタイン『暴力』オンライン公開研究会—暴力と暴力のトラウマについての哲学的再検討」（甲南大学人間科学研究所主催、研究会、第一章を担当）をおこなった。

（西條）

○ 臨床哲学

〔研究室について〕

本年度の在籍者は、学部生28名、大学院生10名（前期課程6名、後期課程4名）、外国人留学生（研究生）1名。堀江剛教授、ほんまなほ教授（兼任）、小西真理子准教授、およびコースアシスタントの各スタッフが教育・研究活動に従事している。

授業として、講義は「コミュニケーションの哲学」（堀江）、「ケアの倫理と臨床哲学」（小西）、演習は「ソクラティック・ダイアローグ」（堀江）、「フェミニズム哲学を読む」（ほんま）、「ギリガノを読む」（小西）のほか、教員3名の合同による「倫理学概論」、「倫理学の研究方法」（学部生中心）、「臨床哲学研究」（大学院生中心）を行った。COデザインセンター開講科目として、ほんま教授による授業「哲学対話入門」「マイノリティ・ワークショップ」「哲学対話進行法」「当事者との対話」「マイノリティ・セミナー」も行われた。さらに本年度も、マイケル・ギラン・ペキット非常勤講師に「Ethics in English」の授業していただいた。

哲学哲学史・現代思想文化学専門分野とともに、機関紙『メタフェシカ』第51号（2020/12）を刊行。

2020年11月14日、大阪大学豊中キャンパスおよびオンラインにて、臨床哲学研究室主催第2回臨床哲学フォーラム（規範の外の生と知恵）「BDSMをとりまく生の営み：ケアとは何か？」を開催。河原梓水さん（福岡女性大学）に研究発表「日本の商業BDSMと「眞のSM」の追求」、観葉月らみいさん（フリーランス女王様）に講演「SMと私」を行っていただいた。加えて、研究室教員のほんまなほさんは、発表「女装フォビア、性的指向、ジェンダー・アイデンティティ」、小西真理子は、研究発表「女性サディストの技術とフェミニストなマゾヒスト——BDSMの視点をつうじた『ケア』の再考」を行なった。

2021年2月10日、オンラインにて、臨床哲学研究室主催第3回臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられる声を聴く）「書くことと、考えること、行動すること」を開催。講師として栗田隆子さん（文筆業&活動家）を招聘した。

2021年6月23日、大阪大学豊中キャンパスおよびオンラインにて、臨床哲学研究室主催第4回臨床哲学フォーラム（組織と対話）「組織に関わる悩み・違和感」を開催。話題提供として、中川雅道さん（神戸大学附属中等教育学校教諭）に「学校組織の悩みから」、菊竹智之さん（一

般社団法人イケダ大学職員）に「福祉組織の悩みから」、ほんまなほさんと高橋綾さん（大阪大学教員）に「生協組織に関わったときの悩みから」をお話していただいた。

[教員について]

堀江剛教授は、研究・社会活動として以下のものを行った。国際セミナー報告：「ソクラティク・ダイアローグ：理想とは何か」、小論：「生の欲と規範」（いずれも大阪大学臨床哲学研究室『臨床哲学ニュースレター』vol.3、2021/3）。研究発表：「スピノザと哲学カウンセリング」（慶北大學（韓国）哲学科招待講演、Zoom、2021/10/23）、「病院組織と倫理問題：システム論の視点から」（2022年度組織学会年次大会、共同発表者：服部俊子（大阪市立大学）、Zoom、2021/10/31）。セミナー・ワークショップ：「感情と組織」（大阪市立大学大学院都市経営研究科、医療福祉経営倫理演習講師、2021/1/31）、「哲学カフェアラカルト vol.2：距離」（市民団体カフェフィロ、哲学カフェ進行役、Zoom、2021/2/14）、「SD：組織とは何か」（代表を務める科研「組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究」、大阪市立大学杉本キャンパス、2021/1/27-28）、「SD：豊かな交流とは何か」（日本哲学プラクティス連絡会メンバー主催、Zoom、2021/3/27）、「組織に関わる悩み・違和感」（第4回臨床哲学フォーラム「組織と対話」の企画・司会、大阪大学豊中キャンパス&Zoom、2021/6/23）、「医療現場の「話し合い」と哲学プラクティス」（日本哲学プラクティス第3回大会ワークショップの企画・進行、Zoom、2021/9/5）、「テッドク：スピノザ『エチカ』：どうして「神=自然」の倫理学なの？」（市民団体カフェフィロ、セミナー講師、Zoom、2021/9/20）。

小西真理子准教授は、研究・社会活動として以下のものを行った。論文：「はじまりの場所：臨床哲学との出会いをつうじて」（大阪大学臨床哲学研究室『臨床哲学ニュースレター』vol.3、2021/3）、「支配する技術・欲望される支配：SMをめぐるトラウマ研究に向けての試論」（大阪大学臨床哲学研究室『臨床哲学ニュースレター』vol.3、2021/3）、対談：河原梓水・小西真理子「京大・緊縛シンポジウムを考える」（『フィルカル』vol.6 (2)、2021/8）。研究発表・講演：「女性サディストの技術とフェミニストなマゾヒスト——BDSMの視点をつうじた『ケア』の再考」（大阪大学、第2回臨床哲学フォーラム（規範の外の生と知恵）「BDSMをとりまく生の営み：ケアとは何か？」、2020/11/14）、「『現場』に関わる研究者の倫理：『役に立つ』ってどういうこと？」（オンライン、第3回日本哲学プラクティス学会、シンポジウム：哲学プラクティス連絡会・哲学プラクティス学会共同企画「哲学プラクティスの倫理」、2021/9/5）、「研究者による当事者加害の『その後』を考える」（オンライン、第72回日本倫理学会ワークショップ「〈応用〉することの倫理——緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」、2021/10/1）。その他：代表を務める科研「嗜癖的関係性と家族の「病理」をめぐる臨床哲学的研究」、受賞：第14回社会倫理研究奨励賞審査員賞（南山大学社会倫理研究所、2021/3）、寄与：「つながる願い：依存症の親をもつ子どもたちへ」（籠橋一輝編『希望の種をまく人——マイケル・シーゲル氏を偲んで』南山大学社会倫理研究所設立40周年記念刊行物）。

〔学生について〕

桂ノ口結衣院生は、下記の研究・社会活動を行った。口頭発表：「参加報告：第 17 回哲学プラクティス国際会議」(Zoom、哲学プラクティス学会第 3 回大会、2021/9/5)。「「哲学カフェの倫理」を考えるための「哲学プラクティスの倫理」」(Zoom、哲学カフェ実践者交流会・メタ哲学カフェ、2021/11/6)。報告執筆：桂ノ口結衣・桂悠介「ピアレビュー会（於：哲学プラクティス連絡会第 6 回大会）について」(みんなで考えよう (4) 6-15、2021 年 9 月)。ワークショップ進行：桂ノ口結衣・井尻貴子・小川泰治・鈴木径一郎・安本志帆・山本和則「哲学プラクティショナーはどう協力して作業できる？：倫理綱領勉強会の経験を手がかりに」(Zoom、哲学プラクティス連絡会第 7 回大会、2021/9/4)。研究助成：第 13 回未来を強くする子育てプロジェクト、スマセイ女性研究者奨励賞、「「子どもの哲学（P4C）」における哲学的事例検討の手法と有効性：実施例の質的調査を通じて」。

松本渚院生は、研究活動として以下のものを行なった。研究発表：伊藤駿、高原耕平、松本渚、中丸和「災害の記憶／記録の伝承を考える」(日本比較教育学会第 57 回大会、2021/6/25、オンライン)。

徐彬原院生は、研究活動として以下のものを行った。報告文：「質問 2：【質問 2】『野生の声を聴く』を読む——声を聴くことに関する思考」(大阪大学臨床哲学研究室『臨床哲学ニュースレター』vol.3、2021)

鈴木萌花院生は、研究・社会活動として以下のものを行った。報告文：「質問 1：当事者の哲学における『当事者』と『わたし』の距離」(大阪大学臨床哲学研究室『臨床哲学ニュースレター』vol.3、2021)。

(小西)